



「ほら、早く脱ぎなさい」

「うう……わ、わかりました」

彼女——桃鈴ねねは、顔を真っ赤にしながらか制服をたくし上げた。
その童顔に見合わぬデカパイが「ぶるるんっ♡」と零れ落ちる。

あなたは口の端からよだれを垂らしながら、

「ぐふふ、これはまた……」

可愛い顔して随分と凶暴なおっぱいが出てきたものだw」

だろっ♡



「こんなデカ乳だと、
枕営業のときはさぞかし喜ばれるんだろうねえw」

「そ、そんなこと……
ねねは、枕なんてしたことないもん」

アイドルとしての誇りを傷つけられたのか
あなたを見遣るねねの目つきは少し反抗的だ。

枕営業なんかしたことないと彼女は言ったが、果たして本当にそうだろうか。
芸能界を牛耳る汚い大人が、こんなドスケベボディの美少女を放っておくとは思えない。





ねねが学園に内緒でアイドル活動を行っていると知ったのは、つい先日のことだ。

この学園では生徒の就労を校則で禁止している。

そこであなたは、学園長という立場を利用して下劣な企みを思いついた。

この日、あなたはねねを呼び出して退学処分にすると宣告した。あまりにも厳しいその処罰に、ねねは大いに戸惑った。すべてあなたの狙い通りだ。

「退学だけは……」と懇願するねねに、あなたは薄ら笑いを浮かべてこう言った。「それなら、今からワシとホテルに来なさい……意味はわかるね?」と。

ねねは悩んだが、最後には首を縦に振るしかなかった。

「さあて。そろそろ始めようか？」

あなたはおもむろにちんぽを取り出すと、
ねねの巨乳の間にずぼと突っ込んだ。

「ひゃうっ!？」

「ひゃう、じゃない。
早くご奉仕をするんだ。
パイズリだよ」

「は、はいずり……?」



「やれやれ
最近のアイドルはパイズリも知らんのか？
そのデカ乳でワシのちんぽを扱くんだよ」

「ええ？」

「ねねのおっぱいで、先生の……
お、おちんちんを？」

「そうだ。早くしなさい」

「あなたが命じると、
ねねはぎこちない動きでパイズリを始めた。」



「ううう……こ、こうですかあ……?」

「うーん、下手くそだな。
もっと上手にできないのかね?」

「だ、だって……」

「こんなことするの初めてだし……」

その不慣れな様子から察するに、
本当に枕営業とは無縁のアイドル人生を送ってきたようだ。

それどころか、まるで男を知らないに見える。

普段は小学生みたいな下ネタできやはきやは笑っているのに、
いざ実物を目の前にするとこのいじらしい反応——
これは実にいじめ甲斐がある。



「はあ、はあ……
先生のおちんちん、すつごく臭い……」
むわあつて変なニオイがするよお」

「ぐふふW

最近は忙しくてロクに風呂にも
入つとらんかったからなあW
ねねくんのおっぱいで綺麗にしておくれW」

「うう……ねねのおっぱいはティッシュじゃ
ないのに……ひゃー！ な、なに？
おちんちんがびくんって跳ねて……」

「ああ、それはもうすぐ射精するという合図だよ。
このままねねくんのお顔にぶっかけるからね」

「えっ？ ね、ねねの顔に、かけちゃうの？ お、お精子を？
そ、そんなの……待って先生、ねねまだ心の準備が……」



ひゅっ!

「あっあっ……さ、先っぽの穴が
ぷくって膨らんで……んんっあっ
ひやはああああああん♥」

「くうっ!!
な、なんて乳圧だ!
搾り取られるっ……!!」

「せ、せんせ♥ 出しすぎだよお♥
ねねの顔、精液で真っ白になっちゃうう……♥
お、お口にも入って……や、やだあ♥ 臭いよおおお♥」

あゝ

あゝ

いっしょ

いっしょ

いっしょ





「はうう……お、お射精したし……
これでもう、許してくれる……？」

「馬鹿を言っちゃいけないよ。
こんなのはほんの前戯さ」

あなたはねねをベッドに押し倒すと、
大股を開かせ、
少女の花弁に醜い肉の棒を押し当てた。

「や、やだ、先生……ッ
セックスまでするの……!？」

「当たり前じゃないか。
なんのためにホテルまで
来たと思ってるんだ？」

「で、でもねね、まだしたこと……」

「まあ、嫌だと言うなら無理強いはいしないよ。
ただしその場合、ねねくんには
学園を辞めてもらうことになるがね」

煽るようにあなたが言うと、
ねねは目尻に涙を溜めながら呟いた。

「せめて、ゴム……っ、つけて、ください」

「ゴムう？」

ワシはナマで突っ込んで子宮にどぴゅどぴゅ
中出しするのが好きなんだがなあw」

「そ、そんな駄目……」

ねね、アイドルなのに、妊娠なんてしたら……」

「ふーむ……しようがない。
少しはワシも譲歩してやるとするか。
ただし、わざわざゴムをつけてやるんだ……
とびつきり媚び媚びのセリフで
誘ってくれなきゃ割りに合わないなあ?」

「え……さそ、う?」

ねねは最初、その言葉の意味が
よくわからなかったようだ。

しかし理解するにつれて顔を赤らめ、
いくばくかの逡巡の後、
自らの秘所を両手で「くばあ♡」と広げた。

そして、アイドルらしい笑顔を浮かべながら、
アイドルらしからぬセリフを精一杯ひねり出した。



「せ、先生♥ お願いしますう♥
ゴムつけてくれたらあ♥

ねねのこと、このデカちんで
いくらでもぶち犯していいですからあ♥

現役アイドルのお♥
きつきつ処女まんこお♥

パパより年上のおじさんちんぽで
お……女にしてくださいさい♥」

ほあ♡♡



「ふんッ!!」

「んっほ、おオオおおおッ♥♥♥」

ゴムを装着するや否や、
あなたは即座に
ねねのおまんこを貫いた。

間髪入れずに容赦なしの
鬼ピストンを開始する。

ねねは生まれて初めての交尾に
目を白黒させながらきったない声で
「おほおおッ♥♥」とか
「ひぐうう♥」とか
言っていた。

あなたは学園長という立場を
利用してこれまでも数多くの
女生徒を食ってきた。

だが、ハジメテのくせして
ここまで乱れるドスケベ女は
ちよつと記憶にない。

そんな淫乱メスガキの穴具合は
期待通りのむちむちまんこで
下手な男なら挿れただけで
いきかねない名器だった。

あなたはほくそ笑みながら
挿挿のペースを更に速めた。

「おおッ♡、おっ♡
おオン♡、おっおっおおッ♡」

「おやおや、アイドルとは思えない酷い顔だねえ?」

「や、やだああ♡ 見ないでええ♡」

「先生のちんぽ、そんなに気に入ってくれたのかな?」

「うっ……はあ、んん……♡」

「ねねくん? どうした?」

「質問してるんだよ? 早く答えんか!」

「勢いをつけてどちゅん! と膣奥を一突き。」

ッ
ッ
ッ

ッ
ッ
ッ

ッ
ッ
ッ

ッ
ッ
ッ

「ひや、ひやいいいい♡
先生のおちんぽ、
気持ちいいれすうう♡」

「ねねは白い喉を仰け反らせて
「あへえッ♡」と鳴いてから、

「ぐふふW
そうやって正直に
言えばいいんだW」



「それにしても、この反応……
到底初体験とは思えないなあ。
本当はやっぱり、枕営業で
やりまくってたんじゃないのか？ ええ？」

「ち、違いまひゅ♡」

ねね、本当にハジメテ♡

そ、それなのにどうして、こんな♡」

「お、いきそうか？」

いくときはいくって言うんだぞ？」

「は、はひい♡」

もうイぐ♡ イきまひゅ♡

先生のおちんぽで、ねね……♡

イツ、イクイクイク♡

イっぐううううウウン♡」

ねねは腰が

浮き上がるほどに痙攣しながら
ド派手に愛液をぶち撒けた。

強烈な膣肉の収縮でちんぽが
締めつけられ、あなたの射精欲も
急激に高まる。

どくんっ——

どくっどくっどくっ——

「あぁっ♡ あちゅいい♡

ねねの中に出てるよおお♡」

ゴム越しに打ちつけられる
ザーメンの熱を感じながら、
ねねは快楽に悶えた。

「はひい♡ はひい♡ はひい……♡」

ねねのお子様脳味噌では処理できないほどの肉悦を一気に教え込まれた反動か、彼女はたったの一回戦でもう虫の息だ。

「ねねくん。バテてる暇はないよ？」

あなたはねねの中からちんぽを引き抜き、使用済みのコンドームを投げ捨てた。

水風船のように膨らんだそれが、ねねの傍らに転がった。

それを見詰めるねねの表情は例えようもなく淫靡だった。

「こんなの中に出されてたら絶対に孕んじゃう♡」とか思っているのかもしれない。

「も、もう、無理、でしゅ♡
許して……せんせ……♡」

ベッドを這って逃げようとするねねにあなたの巨体が覆い被さった。

「おっと、どこへ行く気だ？」

駄目駄目、逃さないよねねくんW」



「そうら、ねねくんのおまんこは
どこかなあ？　ここかな？
うーん、ケツがデカすぎて尻たぶを
掻き分けるのも一苦勞だわいw」

「あ♡ あ♡ 待って、先生♡
ゴム♡ ゴムつけて♡」

ねねは枕元からコンドームの袋を掴み、
それを必死に押しつけてくる。

「ああ、ゴムね……
わかったよ。ほら、つけたぞ？」

「言いつつ……
あなたはそれをぽいっと投げ捨てた。

そのことにねねが気づく前に
あなたは挿入の準備を整えた。

禁断のナマちゃんぽが、

ねねのおまんこに
「ずぶずぶずぶ♡」と入り込んでくる。

「んはああああ……ッ♡」



「オツ♥な、なにこれ♥
さつきより、なんか……♥」

「おやあ？
どうかしたのかな、ねねくん？」

「お、おちんぽの感じが、さつきと違って……おんっ♡」

「ああ、それは体位の問題だね。さつきは仰向けだったけど、今度はうつ伏せだろう？だからおまんこの感じ方も違ってくるわけだ。勉強になったね？」

「な、なったあ♡
しゅごつこれえっ♡
さつきより全然
熱くて、硬っ…あい♡」

ナマちゃんぽがよっぽど気持ちいいのか、
ねねはこれが交換条件のための
行為であることなど
すっかり忘れて能天気な喘いでいた。

Ex. 1. Ex. 2.

۱۲

しかしふと首を傾げたとき、
ねねはそれを見つけてしまった。

「あつ……え？」

こ、これ、ゴム？

さっき渡した……え？

こんなところに、なんで？」

「おっと、気づかれてしまったかw」

「せ、先生？ 気づかれたって……え？」

ええ？ う、嘘だよな？

ちゃんとゴムしてるんだよね？ ね？」

「どうかな？」

自分の目で確かめてご覧w」

あなたはねねの両腕を掴むと、
まるでプロレス技を仕掛けるように
体位を入れ替えた。

ビュッ
ビュッ

あーっ
あーっ
あーっ

1P
1P
1P

1P
1P
1P

1P
1P
1P

1P
1P
1P

自らの股ぐらに出入りする
その逸物を見てねねは目を丸くした。

「あ、ああっ♥ どうしてえ♥

先生…これ…ゴムついてないよお♥

精液でべっとり汚れたおちんちんがねねの中に入っちゃってるう♥ 抜いて、抜いてええ♥」

「そんなに慌てなくても抜いてやるさ

ねねくんの中にたっぷり射精した
後でなW」

「じゃ、射精って…嘘おお♥」



「ひイン♥

先生のおちんぽ……

ほんとに震えて……あふっ♥」

「ナマ中出しは気持ちいいぞおW

なんだかんだで

女はこれに一番弱いからなあW

ねねくんもきつと気に入るはずだW」

「だ、駄目なのオ♥ おっ♥

どんなに気持ちよくっても

中出しはらめえ♥

に、妊娠しちゃうからあ♥」



「ね、ねえ♡お願い先生え♡

ねね、まだ子供だし♡

赤ちゃんなんて無理だよおお♡」

「お、そうだな。

ねねくんは身体ばかりいやらしく成長してるが

頭の中はクソガキのままだもんなあw

そんなガキにガキを産ませるなんて……

うーん、興奮するなあw」

「ひ、ひうう♡ らめらってばああ♡

ねねを勝手にお母さんに

しないでえ♡」

あなたの無責任な発言を受けて、

「この人は本当にわたしのことを

オナホとしか思っていないんだ♡」と

ねねは理解させられた。



「さ、出すぞねくん？」

約束通り退学の件はなかったことに
してやるから安心して孕みなさいw」

「あっ♡ 待って♡

も、もういいです♡

ねね、もう退学でいいからあ♡

おちんちん抜いて♡ 早く、早くうう♡

早く抜かなきゃお射精始まっちゃうよお♡

ああっだめだめだめえ♡

おちんぽびくびくしないでっ♡

グロ

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク

グロ

あ

あ

お願いだから我慢してええ♡
いやああああ——ッ♡」



膣内射精の瞬間、ねねの身体がびくんと跳ねて
あなたはそれを強引に押さえつけた。

「んおっ……」

おおおおおおおオオオオ♥

で、出てりゅ♥

出ちゃってりゅううううう♥

ゴムつけてないのにいい♥

先生のお精子が

今度はナマで……

ね、ねねの一番奥にいい♥

ああつやだよおお♥

そんなに注ぎ込まないでええ♥

ねねの卵子の逃げ場が

なくなっちゃうううう♥」



「ふうう……
若いまんこに種付けするのは
やっぱり格別だわいw」

どっふどっふと音を立てながら
あなたの子種が
ねねの子宮を埋め尽くす。

結合部から逆流しようとして
お構いなしだ。

しかもあなたの肉棒は
まだまだ萎える気配がない。

その意味を察して、
ねねの背筋はぞくぞくと震えた。

「このままじゃねね、先生のデカちゃんぽで
ハメ殺されちゃう♥」——と理解しながら、
彼女の手足はもう言うことを聞かない。

心とは裏腹に、ねねの身体は
あなたに全面降伏していた。



「ねねくんのアイドル活動
先生も応援するよ。」

ああ、校則のことなら心配しなくてもいい。
このワシが許可すると言っているんだからね」

ようやく射精を終えたあなたは
ねねの頬をべろりと舐めながら
言った。

「その代わり……」

これからねねくんのことを
アイドルオナホとして
たっぷり使わせてもらうからねW」

爬虫類のようにギラつくその目に
反抗する気力など、ねねにはもうない。

ねねはただ、蕩けた顔で
「はひい……♡」と頷くことしか
できなかった。

